招仙閣とその跡地について

富田　三紗子
（当館学芸員）

1.　はじめに

招仙閣は、明治期に大磯に存在した旅館である。大磯停車場（現大磯駅）の北側に位置し、伊藤博文が好んで利用したことによって知られている。この見晴らしのよい土地は、招仙閣が廃業した後、別荘地として活用され、現在は民家が立ち並ぶ風景となっているが、戦時中には近隣住民の避難先となる防空壕の存在が知られていた。壕の調査報告については、本誌掲載の市原誠氏稿[1]に委ねるとして、本稿では、壕ができる前の当地の姿として、招仙閣の歴史をまとめ、戦時中の壕の掘削との関係を考察する。

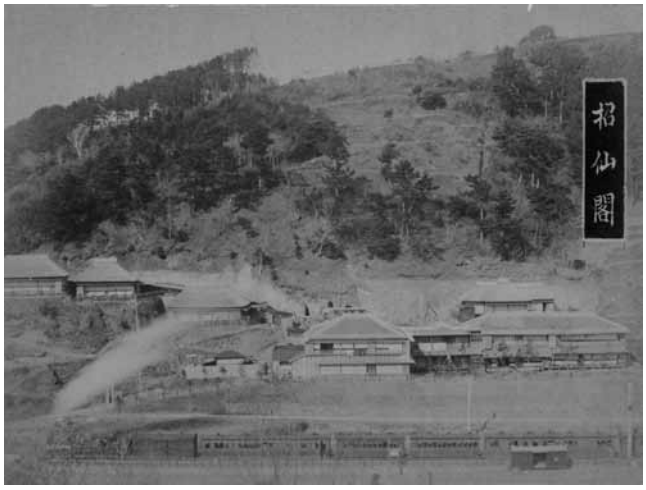

写真　明治 30 年頃の招仙閣（当館所蔵）

2.　旅館「招仙閣」

明治 18 年（1885）に海水浴場が開かれ、同 20 年に鉄道の停車場ができると、大磯には療養を求めて多くの人が訪れるようになった。避寒避暑を求めて訪れる人々のために、大磯には多くの旅館が開業した。招仙閣はそのような旅館の一つである。

『大磯誌』[2]によると、招仙閣は大磯停車場開業 1 カ月前の明治 20 年 6 月に創建され、当時は茶屋町にあったとされる。その後、明治 25 年 4 月に川崎甚三郎、三宅藤兵衛、荻野誠一、佐藤嘉尚の 4 人の名義で、移転後の場所に建物の届が出されたことから[3]、この 4 人が招仙閣を移転したと考えられる。

移転先の地番である大磯字坂田山付 859 番ロ号ほかは、主に川崎甚三郎が所有した土地であった[4]。川崎甚三郎は明治 26 年 4 月から三代大磯町長を務めた人物であり、江戸時代に大磯宿の廻船問屋として著名であった川崎屋孫右衛門家を出自とする。招仙閣が立地した場所は、当時でこそ大磯停車場の北側に面し、利便性に申し分のない場所であったが（写真）、停車場ができる前は大磯宿の中心から外れた寂しい場所であったと想像できる。川崎は、恐らく地元の有力者として土地を所持していたのだろう。

三宅藤兵衛は、大磯宿の名主三宅家であり、私財を投じて善兵衛池という用水池をつくった善人善兵衛を祖に持つ。川崎甚三郎、三宅藤兵衛、荻野誠一は、建物の届を出した明治 25 年当時、町会議員を務めており[5]、彼らは町政にかかわる立場でありながら、地域振興のために招仙閣の経営に関与したと言えるだろう。

川崎甚三郎らが建てた招仙閣は、その後、明治 29 年に下谷銀行の頭取などを務めた銀行員千沢専助[6]に売却され、同 30 年 3 月に峰岸棟太郎へ売却された。峰岸は、明治 23 年頃に南本町に住み、現在の長者町付近にあった旅館「松林館」で仕事をしていたという。そのため、招仙閣の経営を任されたと考えられている。峰岸は明治 25 年に川崎甚三郎らが建てた招仙閣と考えられる建物を購入する前から、明治 26 年に招仙閣に隣接する土地を購入している[7]。

大磯に居宅「滄浪閣」を構えた伊藤博文は、招仙閣を気に入り、よく滞在した。伊藤はもともと小田原に別邸「滄浪閣」を構えていたが、明治 23 年頃に小田原の別荘へ赴く途中、大磯に立ち寄ったことをきっかけに当地を気に入り、大磯に滞在する際には招仙閣を利用するようになったようである。明治 26 年 10 月には招仙閣で陸奥宗光外務大臣らを招いた観月会を開き、翌 27 年以降 2 年間は、梅子夫人が持病を癒すため、招仙閣で静養した[8]。

このように招仙閣には伊藤をはじめとする著名な政財界人が多く訪れた。元文部大臣であり、大磯在住であったことから大磯町名誉町民に選ばれた高橋誠一郎は、随筆の中で大正元年頃に招仙閣に滞在したことを綴り、伊藤博文に愛された招仙閣には、かつて伊藤の関係者が多く宿泊していたと聞いた、と記している[9]。

3.　招仙閣の隆盛

伊藤博文によって贔屓にされ、多くの著名な政界人が訪れたと語られた招仙閣には、その往時を伝える資料が現存している。招仙閣の主人に宛てて揮毫された書画類が、この程、東光院において見つかった。

この書画類は、もともと大磯町内の商店初竹屋が所有していたものである。初竹屋は、荻野誠一が経営した呉服店であった[10]。

書画の内、作成者が判明したものを表 1 にまとめた。これらの書画には、贈り先として「招仙閣」、

「招仙閣主人」、「荻野」と書かれているものが見受けられる。また、作成者が特定できなかったため、表からは除外したが、「峯岸」と書かれた画幅も存在している。「荻野」は荻野誠一を、「峯岸」は峰岸棟太郎を表していると推測され、招仙閣の経営者に宛てて作成されたものと断定することができる。一部の書画は年代を特定することができ、明治30年代のものが多い。贈り先として見られる荻野は、この時期は招仙閣の経営を峰岸へ譲っているはずであるが、実際は関与していた可能性がうかがえる。

書画を残した人物が、必ずしも招仙閣を訪れたとは言い切れないが、その可能性を否定することはできない。以下、伊藤博文を除き、各人物の概要を述べ、招仙閣との関係を推測する。

(1) 西園寺公望

嘉永2年（1849）に右大臣の徳大寺公純の次男として誕生し、同5年に西園寺師季の養子となった。明治政府の下では参与に任官され、新潟府知事などを務めた後、明治15年に伊藤博文に随行し、ヨーロッパで憲法調査を行った。第二次伊藤博文内閣時に文部大臣を務め、伊藤が中心になった立憲政友会の創立にも参加した。日露戦争中、戦後に内閣総理大臣を二期務め、桂太郎と交代で務めた桂園時代を築いた[11]。伊藤博文の後継者と目され、大磯の別荘も伊藤博文の本邸「滄浪閣」の向かいに位置した。

(2) 山縣有朋

天保9年（1838）に長州藩に生まれ、京都で吉田松陰の門下生と交流したことをきっかけに、松下村塾へ入門した。明治政府の下では、陸軍大輔として徴兵制を推進し、国内の軍制を整備した。内閣総理大臣を二期務め、伊藤博文とは政党政治の考え方などで対立した[12]。現在の大磯中学校付近に別荘を構えた。

(3) 樺山資紀

天保8年に薩摩藩士の橋口家に生まれる。文久3年（1863）に同藩士樺山四郎左衛門の養子となり、明治政府では陸軍・海軍に所属し、第一次山縣有朋内閣では海軍大臣を務めた。現在の大磯町役場近く等に別荘を構え、大磯で没した[13]。

(4) 松本順[14]

順天堂の創設者である佐藤泰然を父に持ち、17歳で幕府御医師の松本良甫の養子となった。医師として江戸時代は将軍家の侍医を務め、明治時代は陸軍軍医総監などを歴任した。大磯では、治療に効能があるとして海水浴場を開いたことで知られ、町に海水浴客を呼び込んだ恩人として町民から慕われた。招仙閣近くに別荘を構え、当地にて明治40年に死去し、墓所は大磯にある[15]。

(5) 佐藤進

弘化2年（1845）に常陸太田（茨城県）の高和家に生まれ、安政6年（1859）に佐藤泰然の順天堂に入門し、泰然の養子である佐藤尚中の養子となって、佐藤進と名乗った。明治8年に尚中の後を継ぎ、順天堂の第三代の主となる。日露戦争時に、陸軍軍医総監を務めた[16]。養子関係ではあるが、松本順の甥にあたり、その縁で招仙閣を訪れた可能性がある。また、別荘を所有していた事実は確認できていないが、明治23年頃、大磯字池田2,040番

表1　招仙閣に関係する書画の作成者及び贈り先

本文番号	作成者	書画種類	合計点数	年代	贈り先
	伊藤博文	書幅、書	2		
(3)	樺山資紀	書幅	1		
(11)	観世清之	書	1	明治38（1905）	
(1)	西園寺公望	書幅	1		
(5)	佐藤進	書	3	明治39（1906）	招仙閣
(10)	東郷平八郎	書	1	明治39（1906）	
(9)	中田敬義	書	2	明治期	荻野
(6)	土方久元	書	1		荻野
(4)	松本順	画幅、書	2	明治30-33（1900-1907）	荻野
(7)	元田肇	書	1	大正期	荻野
(2)	山縣有朋	書幅	1		
(8)	渡邊昇	書	2		招仙閣主人、荻野

※作成者名の五十音順

ロ号に1反余りの畑地を所有していた記録がある[17]。

(6) 土方久元

天保4年に土佐藩に生まれ、幕末は尊王思想の影響を受けて土佐勤王党に参加し、尊攘運動、倒幕運動に投じた。明治時代は国政に参加し、第一次伊藤博文内閣の下で農商務大臣や宮内大臣を務めた[18]。

(7) 元田肇

安政5年（1858）に豊後国国東郡来浦村（現大分県）に生まれ、杵築藩の儒家元田竹渓の私塾で学んだことを縁に、元田の息子の養子となった。東京大学を卒業した後、代言人（弁護士）を経て、第1回総選挙以来、衆議院議員を40年間務めた。伊藤博文が明治33年に立憲政友会を立ち上げた際、その活動に参加し、以来、長く政友会の党員であったことから、党の中心人物として目された[19]。現存する書は、乃木希典の殉死を詠んだ漢詩であることから、大正元年（1912）9月以降に作成されたと考えられるが、後述するとおり、招仙閣は同年8月31日頃に閉業している可能性があるため、どのタイミングで荻野誠一に贈られたのかわからない。元田は大正15年頃から自身も大磯に別荘を構えており[20]、政友会を通して伊藤との関係は深かったと考えられる。

(8) 渡邊昇

天保9年に肥前国（現長崎県）大村藩士の家に生まれた。17歳で江戸に出た際、剣術を学んでいた先で木戸孝允と知り合い、以後、薩長連合の実現に協力するなど、倒幕運動に参加した。明治以降は、大阪府知事などを経て、明治17年に会計検査院長に就任し、同31年に辞任するまで、会計検査制度の整備に尽力した[21]。

(9) 中田敬義

安政5年に加賀国（現石川県）金沢に生まれる。榎本武揚や陸奥宗光が外務大臣を務めていた際に、外務大臣の秘書官を務めた。中田は陸奥から厚い信頼を得ており、陸奥が明治28年5月から大磯の別荘で静養するようになってから交わされた書簡が、外務省外交史料館に所蔵されている[22]。陸奥の静養中に大磯を訪れ、招仙閣に滞在した可能性が推測でき、招仙閣の経営が峰岸棟太郎へ渡る前のことであるため、書の贈り先が「荻野」であることも矛盾しない。

(10) 東郷平八郎

弘化4年生まれ、薩摩藩出身。海軍に所属し、様々な軍艦の艦長を歴任した。日露戦争の連合艦隊司令官として主要作戦を指揮し、日本海海戦でロシアのバルチック艦隊に勝利したことから、国内外から賞賛を受けた[23]。一時的に大磯に居住したことがあり、町内の高来神社に建立された忠魂碑に揮毫している[24]。

(11) 観世清之

嘉永2年（1849）生まれ。観世流シテ方であり、観世喜之家の創始者。明治時代の能楽復興に貢献した[25]。招仙閣との関係についてはわからないが、東京に居住した芸能者として、大磯に訪れた可能性は高い。

書画が贈られた時期は、招仙閣に伊藤博文とその関係者が集ったと言われている時期に一致する。これらの書画からは、招仙閣に伊藤博文や伊藤の知人が集まり、様々な談義を交わしていた様子が垣間見える。招仙閣の隆盛は、政界の奥座敷と言われる大磯の一端を示すものである[26]。

4. 招仙閣廃業後

伊藤博文などの大物政治家が集い、隆盛を極めた招仙閣であったが、その繁栄は明治期までであった。大正4年（1915）3月に作成された「家屋取崩綴」という文書によると、大正元年8月31日には、峰岸棟太郎が所有する建物が、次の所有者として知られている加藤正治へ売却されていることがわかる[27]。高橋誠一郎は、前述した随筆の中で、大正元年頃に招仙閣で療養し、招仙閣は大正10年代頃には加藤の手に渡っていたと記述しているが[28]、再考の余地があるだろう。招仙閣の廃業は、大磯に行楽に訪れる人々が別荘を所有するようになったことにより、大磯の旅館業が衰退したことを受けてのことと考えられる[29]。

先述したとおり、招仙閣が位置した現在の大磯駅の北側は、江戸時代は何も存在しない丘陵部であったと考えられる。「新編相模国風土記稿」や「東海道分間延絵図」にも記載は見当たらない[30]。ただし、『大磯誌』に招仙閣付近から古剣類が出土したという記録があり[31]、横穴墓の存在は推測されている。改めて、前掲した招仙閣の写真を見ると、中央の建物裏に横穴墓のような穴が確認できる。恐らく、明治時代になり、大磯停車場ができて招仙閣が移転するまでは、横穴墓の他は建造物のない土地であったと考えられる。

川崎甚三郎らが招仙閣を当該地に移して以降の建物の変遷について、表2にまとめた。いずれも旧大磯町行政資料に含まれる家屋台帳等を参考に作成したが、必ずしも全容を把握することはできず、推測も含まれていることを断る。峰岸棟太郎が明治30年に招仙閣を経営し始めた当初の建物は、基本的に明治25年に川崎らが建てた建物を継承していたようであり、木造瓦葺二階家が2棟、木造茅葺平家が4棟、木造鉄葉葺平家が1棟の計7棟の建物があった。これは、前掲の招仙閣の写真と一致し、このことから、この写真は明治30年当時の状況を写していると考えられる。

表 2　招仙閣の建物及び所有者の変遷

年代	明治 25 年 4 月	同 29 年 7 月 28 日	同 30 年 6 月
建物	木造瓦葺 2 階家 （252 坪 7 合 5 尺（2 階 112 坪、1 階 140 坪 7 合 5 勺））	木造瓦葺 2 階家 （252 坪 7 合 5 尺（2 階 112 坪、1 階 140 坪 7 合 5 勺））	木造瓦葺 2 階家 （252 坪 7 合 5 尺（2 階 112 坪、1 階 140 坪 7 合 5 勺））
	木造茅葺平家（21 坪）	木造茅葺平家（21 坪）	木造茅葺平家（21 坪）
	木造茅葺平家（18 坪 5 合）	木造茅葺平家（18 坪 5 合）	木造茅葺平家（18 坪 5 合）
	木造茅葺平家 （15 坪 2 合 5 勺）	木造茅葺平家 （15 坪 2 合 5 勺）	木造茅葺平家 （15 坪 2 合 5 勺）
	木造茅葺平家 （19 坪 7 合 5 勺）	木造茅葺平家 （19 坪 7 合 5 勺）	木造茅葺平家 （19 坪 7 合 5 勺）
		木造鉄葉葺平家（3 坪）	木造鉄葉葺平家（3 坪）
			木造瓦葺 2 階家 （44 坪 2 合（2 階 15 坪 7 合 5 勺、1 階 28 坪 4 合 4 勺））
所有	川崎甚三郎、三宅藤兵衛、荻野誠一、佐藤嘉尚	千沢専助	峰岸棟太郎

年代	明治 37 年	大正元年 8 月 31 日	同 14 年 3 月 31 日
建物	瓦葺居宅 2 階建 （80 坪 3 合 3 勺）	瓦葺居宅 2 階建 （80 坪 3 合 3 勺）	瓦葺居宅 2 階建 （80 坪 3 合 3 勺）＊
	瓦葺居宅 2 階建 （19 坪 3 合 3 勺）	瓦葺居宅 2 階建 （19 坪 3 合 3 勺）	瓦葺居宅 2 階建 （19 坪 3 合 3 勺）＊
	草葺居宅（15 坪 5 合）	草葺居宅（15 坪 5 合）	草葺居宅（15 坪 5 合）
	草葺居宅（11 坪 1 合 3 勺）	草葺居宅（11 坪 1 合 3 勺）	草葺居宅（11 坪 1 合 3 勺）
	草葺居宅（13 坪 2 合 5 勺）	草葺居宅（13 坪 2 合 5 勺）	草葺居宅（13 坪 2 合 5 勺）
	草葺居宅（11 坪 7 合 5 勺）	草葺居宅（11 坪 7 合 5 勺）	草葺居宅（11 坪 7 合 5 勺）
	草葺居宅（5 坪 7 合 3 勺）	草葺居宅（5 坪 7 合 3 勺）	
	亜鉛葺居宅（2 坪 5 合）	亜鉛葺居宅（12 坪）	
	亜鉛葺物置（3 坪）	亜鉛葺物置（3 坪）	亜鉛葺物置（3 坪）
		草葺平家（21 坪 5 合 8 勺）	
		草葺平家（30 坪 6 合 2 勺）	草葺平家（30 坪 6 合 2 勺）
		木造瓦葺 2 階建 （20 坪 5 合（2 階 11 坪 6 合）、大正 2 年 7 月 28 日に売買）	木造瓦葺 2 階建 （20 坪 5 合（2 階 11 坪 6 合））
			木造亜鉛葺居宅平家 （53 坪 6 合 7 勺）
			木造亜鉛葺居宅平家 （21 坪 4 合 1 勺）
			木造亜鉛葺物置 2 階建 （建坪 10 坪、階上 8 坪 5 合）
所有	峰岸棟太郎	加藤正治	加藤正治

網掛けは関東大震災によって取り崩した建物。＊を付した建物も、どちらかを取り崩した可能性がある。

明治 27 年 1 月「建物台帳」（旧大磯町行政資料 197-2）、同 29 年 4 月 8 日「建物願届書類」（同 205）、同 45 年「建物書類綴」（同 199-2）、大正 2 年「建物書類綴」（同 207-2）、同 4 年 3 月「家屋取崩綴」（同 216）、同 12 年 9 月「家屋届書綴　別荘一」（同 199-9）より作成。

その後、大正元年頃に加藤正治が峰岸から招仙閣の建物を購入するが、この時の記録に記されている建物は、明治30年当初の建物とは大きく異なっている。表2にある通り、明治37年には建物に変化が見られているため、明治30年代に招仙閣が賑わう中、建物の増改築が行われたことが推測される。

招仙閣の建物を購入した加藤正治は、法学者で中央大学の総長を務めた。加藤はこれらの建物を別荘として所有し、以後は加藤別荘として知られていた。これらの建物11棟の内10棟は、大正12年の関東大震災によって全壊または半壊の被害を受けた[32]。加藤正治の義父で、日本郵船の副社長を務めた加藤正義は、この時、この大磯の別荘に滞在しており、負傷したことが当時の刊行物から知られている[33]。

表2からも関東大震災によって損壊した建物を取り崩し、大正14年に3棟の建物を新築していることがわかる。その後も何回か増改築があり、昭和7年から別荘に勤めていた職員が、後に記憶に基づいて描いた当該地の建物配置図によると、1～4号の建物4棟、「松の家」、「竹の家」、「梅の家」と名付けられた3棟、貸別荘、茶席がそれぞれ2棟に、洋館、新宅が1棟ずつの合計13棟の建物が描かれている[34]。洋館は、加藤正義が日本郵船の関係者であったことから、近隣の住民からは日本郵船の迎賓館と呼ばれることもあったが、実際には迎賓館として利用されていたわけではなかったようである。これらの建物は、昭和20年（1945）7月16日の平塚空襲の際に大半が焼失した。

本誌掲載の市原誠氏稿による大磯字坂田山付1号壕については、大磯町内の空襲に関する聞き取り調査を実施した中で、加藤別荘の防空壕として知られていたことが証言からわかり、実測調査を行うきっかけとなった。この壕は、昭和17年に別荘の所有者であった加藤正治と息子の正隆が相談して掘削することを決め、同年8～10月の2カ月余りで完成した[35]。もともと炊事場の裏にあった漬物置き場を拡張したといい、横穴墓を漬物置き場として利用していたという話もある[36]。市原氏の論稿にもある通り、この壕は加藤家の私的な防空壕ではあったが、近隣住民が避難する防空壕として認識されており、空襲の危険を感じた時は、加藤別荘の防空壕へ逃げると意識していた者もいた[37]。

また、市原氏が指摘するように、横井戸としての利用も考えられる。横井戸として利用されていたものを壕に拡張したのか、壕が掘削された後に井戸としたのか定かなことはわからないが、当地では井戸水の利用が見られ、もともと水道源を確保するためにつくられていた坑道を防空壕に活用したという近隣住民の話もある。防空壕を実測調査した結果、壕内の水源が利用されている痕跡も確認できた。横穴墓を漬物置き場に転用していた場所を、拡張して防空壕にしたという話ではあるが、もしかしたら、一部は、招仙閣があった頃につくられた横井戸を利用した可能性もある。

5. おわりに

明治期の旅館「招仙閣」は停車場に隣接する利便性とその眺望によって、伊藤博文をはじめとする大磯を訪れた人々に利用された。旅館として多くの人々が訪れた期間は、振り返れば20年程度であったが、その後も別荘地として活用され、戦争の影響を受けて防空壕がつくられ、時には近隣住民の避難先となった。当地の履歴は、目まぐるしく移り変わった大磯の近代史を伝えている。

謝辞

本稿の執筆にあたって、稲木静恵氏、平松佳世子氏、平松祐子氏、真壁泰由氏及び東光院の大澤暁空氏、古井昇氏に、調査をご協力いただき、諸事ご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

注

(1)　市原誠「大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査」（『年報―平成29年度―』大磯町郷土資料館、2019年）

(2)　河田羆『大磯誌』冨山房、1907年

(3)　明治27年1月「建物台帳」（旧大磯町行政資料197-2、大磯町立図書館所蔵）

(4)　明治23年1月1日「名寄帳　拾五冊ノ内七」（旧大磯町行政資料230-7、大磯町立図書館所蔵）

(5)　明治25年1月「大磯町会議事録」（旧大磯町行政資料1320、大磯町立図書館所蔵）

(6)　小川功「大正期の泡沫会社発起とリスク管理―河野英良と彼のパートナーを中心として―」（『滋賀大学経済学部研究年報』Vol.12、2005年）p.19

(7)　鈴木昇『大磯の今昔』（七）、1996年、p.105-106

(8)　川本烏城生「滄浪閣と春畝公の平生」（『太陽』臨時増刊号、第15巻第15号、1909年）

(9)　高橋誠一郎「書案の記」（『三田新聞』第485号、1942年4月29日、のち、高橋誠一郎『新輯王城山荘随筆』和木書店、1947年に「峯岸治三君」という項で所収）

(10)　朝倉誠軒『大磯案内』三宅書店、1922年、広告p.21

(11)　国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第6巻、吉川弘文館、1985年

(12)　国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第14巻、吉川弘文館、1993年

(13)　国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第3巻、吉川弘文館、1983年
(14)　江戸時代は良順と名乗った。
(15)　大磯町郷土資料館編『大磯の蘭疇―松本順と大磯海水浴場―』大磯町郷土資料館、2007年
(16)　臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、大日本人名辞書刊行会『大日本人名辞書』講談社、1937年（1974年新装）
(17)　明治23年1月1日「名寄帳　拾五冊ノ内九」（旧大磯町行政資料230-9、大磯町立図書館所蔵）
(18)　臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、日外アソシエーツ編『政治家人名事典』日外アソシエーツ、1990年、大日本人名辞書刊行会『大日本人名辞書』講談社、1937年（1974年新装）
(19)　臼井勝美他編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001年、日外アソシエーツ編『政治家人名事典』日外アソシエーツ、1990年
(20)　大正15年6月現在「大磯町各別荘所有者調」（旧大磯町行政資料226-1、大磯町立図書館所蔵）、昭和3年7月23日訂正「大磯町各別荘所有者調」（同226-2、同）など。
(21)　同注16
(22)　冨塚一彦「陸奥宗光の中田敬義宛書簡について」（『外交史料館報』第11号、1997年）
(23)　国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10巻、吉川弘文館、1989年
(24)　高橋光『ふるさと大磯』1983年、p.209-210
(25)　小林責ほか『能楽大事典』筑摩書房、2012年
(26)　紹介した書画は、現在、当館において寄託資料として管理している。
(27)　大正4年3月「家屋取崩綴」（旧大磯町行政資料216、大磯町立図書館所蔵）
(28)　同注9
(29)　前掲注7、p.102-103
(30)　天保12年（1841）「新編相模国風土記稿」、文化3年（1806）「東海道分間延絵図」
(31)　前掲注2、p.61
(32)　加藤正隆「大正十二年（関東大震災）以後の加藤正治」（加藤正隆編『法学博士加藤正治の記録』中央大学出版部、1998年）
(33)　『大正大震災誌』報知新聞編輯局、1923年、『関東大震災写真帖』日本聯合通信社出版部、1923年など。前掲注32にも当時の状況が記されている。
(34)　近藤六郎「昭和七年の夏　就職（坂田心中の後）」（加藤正隆編『法学博士加藤正治の記録』中央大学出版部、1998年）
(35)　同注32
(36)　前掲注34の図にも、炊事場の裏に防空壕の入り口が描かれている。
(37)　近隣住民の聞き取り調査による。また、前掲注32にも、昭和20年7月16日の空襲の際に、近所の住民が約200人避難したとある。